

林 知弘 70906918

ジグムント・バウマン リキッド・モダニティ のまとめ

- 1925年 ポーランド西部のポズナニという貧しいユダヤ人の家庭に生まれる
- 1939年 第二次世界大戦の勃発 バウマン一家は、ナチスを避けてソ連に移住し、当地の大学で教育を受ける
- 1943年 ポーランド陸軍に入隊
- 1945年 終戦後、ポーランド労働党に入り、社会主義を信奉するようになる
- 1953年 反ユダヤ主義が高まる中、父親がイスラエル移住を照会したことが原因で軍隊を罷免 ここから、社会学者への道を歩んでいくことになる。
- 1954年 ポーランドのワルシャワ大学で博士号を取得し、哲学・社会科学部講師のポストを得る。しかしながら、その後第三次中東戦争の余波の中で、反シオニズムの高まりを受けて、ジグムントは大学を解雇されてイスラエル移住を余儀なくされる。
- 1971年 各国を転々としながらも、イングランドのリーズ大学へ移り社会学教授として教鞭をとる
- 1990年 リーズ大学社会学部教授を辞職し、現在に至るまでリーズに住む。現在はリーズ大学とワルシャワ大学の名誉教授

◆著作は数が多く、日本語訳がなされていない本も多数存在するので、バウマンの問題関心の変遷と共に簡単にみていくことにする。

#### ◆バウマン思想の分水嶺

バウマンの思想の分水嶺は1980年代後半に書き残した三部作でもある、「立法者と解釈者」（1987年）、「近代とホロコースト」（1989年）、「近代とアンヴィヴァレンス」（1991年・日本語訳なし）を書きつつあった時であり、東ヨーロッパとソ連における国家社会主義が崩壊したときである。

国家社会主義が崩壊したことによってバウマンの焦点は社会主義と資本主義の区別から、モダニティとポストモダニティの区別へと移っていった。そして、バウマンが達した結論は、これまで彼が強く信奉していた社会主義のプロジェクトも含めて、モダニティが失敗する運命にあるということであった。

#### ◆近代とホロコースト（1989年）におけるモダニティ批判

ナチスによるユダヤ人のホロコーストは、近代合理社会のなかで、文明が高度な段階に達し、人類の文化的達成が頂点に至ったときに起こったのであるから、決してヨーロッパの反ユダヤ主義の長い歴史の産物によるものではなく、それは近代特有（社会、文化、文

明)の現象であると論じている。ホロコーストを可能にしたのは、人間的主体の実存的様式である、他者に対する責任。換言すれば対人関係の最も純粋な基本構造である道徳(道徳の本質は他者に対する義務であり、それはあらゆる利害関係を超越している)を欠如させ、喪失させることによってであった。この道徳を喪失させた要因こそが、ナチの政治体制が採用した、近代の産物である、社会工学的な設計主義、技術主義、合理主義、官僚主義によるものであった。よって、ホロコーストはユダヤ人のみに限定された問題ではなくて、国家がこのような近代的な社会構造を備えている限り、引き起こされる可能性がある」と結論づけた。

※構造とは相対的反復性、出来事の単調性のことである。認識論的にいえば、それは予測可能性を意味する。蓋然性が規則的に配置された空間をわれわれは構造という。

#### ◆分水嶺以降現代に至るまでのバウマンの問題関心

分水嶺以降、バウマンの思想の中心はモダニティとポストモダニティのダイナミックな関係を探ることに移行していった。2001年にリキッド・モダニティが出版されてから、ポストモダニティという言葉よりも、リキッド・モダニティという言葉を多用し始める。また、近代とホロコーストでも述べられているように、近代以降なおざりになった道徳的主体の構築を主題として設定するようになる。

#### リキッド・モダニティ(2001年)

#### ◆リキッド・モダニティとは

リキッド・モダン(流動的近代)社会とは、そこに生きる人々の行為が、一定の習慣やルーティンへと(あたかも流体が固体へと)凝固するより先に、その行為の条件のほうが変わってしまうような社会のことである。

#### ◆モダニティからリキッド・モダニティへの変遷

モダニティとは前近代の堅固なものを溶解することによって、永続性をもつ堅固さを発見しよう(真理の探究)という強い意志があった。

堅固なものを溶解するという事は、合理性を邪魔する不適切な義務(例えば、仕事を家事や家庭に対する倫理的義務から解放する)を払拭することだった。また、堅固なものの溶解は複雑な社会のネットワークを解体し、経済中心の行動規制に対して無抵抗なものとした。堅固なものの溶解によって開かれた領域は、人間が道具的理性、あるいは経済の絶対的役割に侵略された。また、堅固なものの溶解によって経済は伝統的な政治的、倫理的、文化的束縛から解放された。そして、新たに経済に主眼をおく新たな秩序が固まっていった。この秩序は秩序を脅かす非経済要素の消滅により、旧秩序よりもさらに堅固

なものになった。

近代の永遠の特徴である堅固なものの溶解は、新たな意味をもち、新しい目標に向けられることとなった。目標転換の最大の影響は、秩序や体制を政治問題化する力の崩壊に見られる。流動的近代であるいま、溶かされかけているのは、集団的な事業や集団的な行動において、かつて、個人個人のそれぞれの選択を結んでいたつながりである。

近代の新しい段階、個人の選択の自由、行動の自由を制限すると疑われる手枷、足枷がことごとく溶かされた結果生まれたと言える。つまり、秩序の硬直性は人間の自由が蓄積された結果であり産物である。

現在、近代的溶解力の再配分、再分配がおこっている。溶解力の影響を最初にうけたのは、帰属だけによって決定される世襲財産のような伝統的の制度、あるいは、行動の選択を制約する枠組みであり、相互依存の様々な形態、形式は再定義しなおされた。液状化の力は「体制」から「社会」へ、社会生活の「マクロ」から「ミクロ」段階へと降りようとしている。

#### ◆リキッド・モダニティの問題定義

今日不足しているのは、指針、道案内となる形式、法規、規制である。流動的近代の到来がもたらした人間的状況の変化は、体制が手の届かない存在となり、構造化されていない流動的な生活政治が全面的に出てきたことで、人間的状況は激しく変動した。そうなる、人間的状況を語るために使われていた古い概念も再検討を余儀なくされる。新しい形態をとり、変身することによって、これらは復活可能なのか、これが今の実践的問題であり、復活ができないのであれば、古い概念を埋葬すべきである。

人間がおかれた基本的な状況に関する概念のうち、ここでは解放、個人、時間・空間、仕事、共同体の意味、現実性の輪廻の可能性を探る。(裏のテーマは、個人の道徳性を重視した社会理論の構築ははたして可能であるか?)

本文

#### ◆解放

##### ・近代社会からの解放

近代＝解放を政治改革の目標。そのために自由に最高の価値を付与したが、結果的に不自由な社会をつくりだした

解放＝抑制を取り払い運動や行動において不自由を感じなくなること

##### ・近代社会の代表的な批判（古典批判理論）

古典批判理論＝解放という目的を色濃く反映した理論。権利主義的特性を引きずる社会の、全体主義的傾向を抑制し、無力化し、完全に除去することを目標とする。また、個人が全体主義、均質主義、均一主義的社会からの解放を、人間解放のポイントとする。

・初期近代の根本変化

1. 初期近代の信念（歴史の終焉という考え方やユートピア思想）が崩壊、衰退していった。

2. 近代社会の個人化

・社会の個人化=アイデンティティを「与えられるもの」から「獲得するもの」へと変え、獲得にともなう生じる結果の責任を負わせることから生じる。

↓

個人的関心の増大が増大し、共通利益としての市民性は浸食され、ゆっくりした解体が続いている。

↓

個人化的関心や興味の、公的空間の占領→公的関心の矮小化

・個人社会化による批判理論の変容

古典批判理論の中身も変わる

↓

現在の任務は個人化と権力と政治の遊離によって破壊された公共領域を復元すること

◆個人

・重量主義から軽量資本主義への以降の過程

重量資本主義時代の特徴=フォードイズム（大量生産・大量消費システム）

→フォードイズム=産業化、蓄積、規制すべてのモデル、「重い」「大きい」「非機動的」「固定的」近代を代表する産業形態

軽量資本主義=「軽い」「小さい」「機動的」「流動的」近代を代表する

秩序を管理し、善悪の境界を監視していた政治の解体→社会目的（価値理性）の喪失→手段があっても目的のない社会→個人が目標を設定する（個人化が進む）

・個人化による私的領域の占領

1. 政治の崩壊→私的領域が公的領域を占領→公的領域の再定義の必要性

2. 個人化→欲求それ自体が唯一の目的となる→欲望による消費社会の加速化、支配化

・消費社会によるアイデンティティの形成

自由な消費選択に基づく自由、大量生産商品の消費によるアイデンティティ形成の自由は

電子的イメージ（不安定・流動的）を通じて形成される→自由の再配分的手段にはなるが、解放の媒介にはならない→流動性と柔軟性は祝福でもあり、呪いでもある

↓

アイデンティティは協力と団結を誘発するような統一的状況よりも、分裂と過酷な競争という状況をつくりだす。

#### ◆空間／時間

・都市生活の発展によって現れた状況（空間の変容）

都市生活の発展→共同体は注意深く管理された境界によって定義される共同体、共通性を探ることなく、差異を分離する態度の表出

都市＝見知らぬ者同士が偶然出会い、別れも突然おとずれる共同社会→市民性の必要性

市民性を備えた都市空間＝自分自身をさらけ出さずに（公的仮面をかぶり）、社会参加や、共同参加という形で人々が共有できる空間を備えた環境

・現在の都市環境

現在の都市は「公的空間」が無数に存在→2つの範疇に分類され、それぞれ矛盾（公的でありながら、非市民的）しながら、相互補完的

1. 見物以外のなにものもない空間

2. 消費者のための空間、あるいは都市生活者を消費者に変身させる空間（ショッピングモール）→空間的移動が第一の目的、時間的移動は二の次

↓

買い物／消費空間は、均衡のとれた自由と安全を提供する

・公的でありながら非市民的な空間

① 嘔吐的空間＝根本的に異端と見える他者を、体外にだし、他者との物理的接触が禁止された空間（ゲッターなど）

② 食人的空間＝異質な肉体、精神を摂取し、摂取した人間との同一化を図る（消費空間など）

③ 非空間＝部外者の逗留を許しながら、彼らを無の社会的存在に変え、自我性を帳消しにするような空間（空港・高速道路など）

④ 空虚な空間＝意味を欠く空間（それぞれが足を踏み入っていない場所、また、踏み入れることによって不安を感じるだろう場所）

※①～④の共通特徴は相互関与を不要とする→共通の利益と目標を見知らぬものと分かち合う技術はめったに使用されなくなった

↓

共通の利益を基礎にした交渉的合意ではなく、共通のアイデンティティによって安定をみいだすことが、最も効果的なものごとの進め方として浮上した（他律を前提とした文化・民族性）



「他者」や、差異を切り離そうとする努力、共同参加の必要性を排除する意思是、社会的絆の弱さ、流動性から生じる実存的不安への予想された反動であった。

・リキッド・モダニティにおける時間

近代の開始→時間の空間からの解放、時間の人間的想像力や技術力への従属、空間制服、領土拡大としての時間の利用



これ以降、時間と空間の概念は、一時的、経過的、動的なものとなった



重い近代から軽い近代への移行

※重い近代＝ハードウェアの時代、道具的理性の時代、時間は価値の獲得、フォーディズムの時代

※軽い近代＝道具的理性の極限化の時代、瞬間性の支配の時代、資本と労働の解放の時代、スリム化の時代、継続性（永遠性）の無価値化、解体化の時代



瞬間性の到来によって人類の文化と倫理が崩れる（「過去を忘れ、未来を信じない」現在）

#### ◆仕事

・近代型ユートピア（よりよい世界の創造）、進歩史観の揺らぎの原因

1. 世界を前進させる主体の明らかな欠如
2. 進むべき方向の欠如
3. 進歩の意味が極度に個人化（民営化）したこと

・仕事の意味の変容

秩序形成、人類に自らの運命を決定させる歴史的行動への貢献（共同努力）



暇つぶし（無意味化）＝自己、アイデンティティ、生活設計の足場にならない＝社会の倫理的基礎とも、個人生活の道徳的基軸にもならない



仕事の価値が快、不快によって判断されるようになった

・労働の発生と衰退

労働の三面的構造＝仕事の意義（肉体的・精神的労苦）、仕事をする者たちの階級形成、この階級に根差した政治



労働と生活の分離＝労働の商品化・脱土地化



生産行動と生活行動一般が切り離される



仕事の意義が独立した現象（物として扱われる）になる

堅固な近代＝資本と労働が相互依存の原理で密接に連動し合う重厚な資本主義の時代



重い資本主義における時間軸は長い＝長期的精神構造→労働の買い手と売り手は、長期間、密接に結びついて離れない→相対的安定性を確保

軽い資本主義における時間軸は短い＝短期的精神構造→柔軟性が現在の代表的スローガンとなる→短期契約、契約更新型の雇用、契約のない雇用→相対的不安定性へ

・軽い資本主義

現代的不安定性＝個別化を進める強い力→連帯でなく分断をもたらす→共通の利益は実質的な価値をもたない→連帯や協力の消費物化→自分自身、他者、組織に対する信頼の欠如へ

軽い資本主義＝資本と労働の繋がりを緩める→資本の労働への非依存→脱場所化

・動きの速度が、社会の階級化と力のヒエラルキーを決定する究極の要素

利益の源泉が物からアイデアへ、ネットワーク技術の発達（携帯電話など）による、生活世界における精神距離の無限化、情報の耐用期間の短期化

高速で移動する資本と、移動を止めようとする各地域権力の綱引きが今日の政治である



環境整備とは、自由な企業のルールに政治を合わせることであり→規制緩和等を通じて柔軟な労働市場の設置へ



ネットワークに支配を及ぼさなければ政治組織は弱体化（ジャック・アタリの引用）

#### ◆共同体

##### ・共同体とは

共同体とは幸福な社会という古典的ユートピア像のなかから、唯一生き残った概念であり、「実生活」ではほとんどおこりえないような連帯感、「われわれ皆同じ」といった同質性にもとづく連帯感獲得のための近道である

##### ・液状化する共同体

液状化する共同体→個人の自由と、個人の安定の均衡が崩れる→他者との繋がりが希薄化→不安定な個人の誕生→アイデンティティの確立のために共同体を選択する→自らが本質的に帰属する集団と思ひこむ



共同体＝共同体の外にあるものが、共同体の敵対者であり、未開地と見えた時に完成する。

##### ・共同体の形態（民族主義第二型）

民族性の利点→その歴史を「自然の歴史」と捉える

近代民族国家は民族的均一性を第一の属性とする→選択の自由を与えない＝帰属は宿命

民族主義（＝嘔吐的）と愛国主義（＝食人的）は、主義に対する熱意の有無によって区別される→差異による統一か、類似による統一か

##### ・近代民族国家のあと

グローバルパワー（超地域性・高速移動・逃避・回避能力）→共同体間の反目や不和を助長する→民族対立の傷口を広げる→地球警察なるものをつくっても傷口は回復しない

##### ・流体的近代型の爆発的共同体

＝変化しやすく、一時的

##### 1. クローク型共同体

バラバラな個人の共通の興味に訴える→一定期間関心を繋ぎとめる→しかし、個人の関心を融合し、「集団的関心」に統一するようなことはない

5/5

##### 2. カーニヴァル型共同体

個人の欲求不満のガス抜き



クローク・カーニヴァル型共同体→人間の孤独を永久化する→個人化＝道徳的最少主義

◆リキッド・モダン分析→リキッド・ライフの分析→幸福論へ

リキッド・ライフとは、リキッド・モダン社会における生のあり方である

→不安定な生活であり、絶え間ない不確実性のなかで生きることである

◆社会システム論からの批判

・大庭健（倫理学者）

「社会システムは、社会システムの複雑化にともなう新たな問題を解決するサブ・システムを形成していく」といったシステム論の立場からすれば、「美德・悪徳を持ち出すのは、時代錯誤の空論」であって、「葛藤を処理する機能システム」の分化こそが問題となる。

・ノルベルト・ボルツ

世界コミュニケーションの理論は、主体ではなくシステムと取り組む。様々の社会システムから成る社会にとって意識（＝心的システム）は環境にすぎず、意識にとってそのような社会は環境にすぎないという見方。「『責任の原理』は全く宗教的な原理から生まれたものに他ならず、脱魔術化された世界のただなかで、人間性という『神秘』を再び舞台に登場させようとする。」→人間本位主義の基本構造は宗教的なものである。

#### 参考文献

近代とホロコースト 大月書店

リキッド・モダニティ 大月書店

リキッド・ライフ 大月書店

バウマン社会理論の射程（ポストモダニティと倫理）中島道男 青弓社

世界コミュニケーション ノルベルト・ボルツ 東京大学出版会